

一〇一五年三月二八日

春泥の長靴逆さ干す飯場
首塚にぬかづきをれば揚雲雀
通勤の朝の里路に初音聞く
木の芽時なれば昼餉は庭椅子で

一〇一五年三月二七日

蛇行してつづく菜の花堤かな

横断歩道渡る訓練入園児

一〇一五年三月二六日

初蝶と会ふ里バスの停留所
黄砂降る平安京も幻に

一〇一五年三月二十五日

足先のはみ出してをる春炬燵

白魚の跳ねて綺羅散る四つ手網
初蝶と抜きつ抜かれつ野路楽し

一〇一五年三月二十四日

茎立の葉牡丹のこす一末社

明日香川春を集めて高鳴りぬ

病室やはばかるほどに咳止まず

里山路ゆけば鶯本調子

うららかや埴輪もおしゃべりしたそうに
つくばいの水面掃きゐる柳の芽

山 椒 明日香 よし女
千 鶴 む べ よし女
千 鶴 む べ よし女

一〇一五年三月二三日

老い母に草の名習ひ野に遊ぶ
この道はかつて畦道つくづくし
古街や店先ごとに雛飾る
青空をしとね水面の落椿
踏青や母の歩幅の狭くなり
子と並び漕ぐふらここに風優し

一〇一五年三月二三日

お彼岸の供花に華やぐ墓苑かな
大干潟タンカー沖に遠ざけて
船うらら真一文字に白き水脈

毎日句会みのる選・一〇一五年三月二三〇日

康 子 はく子 みきお みきえ
康 子 はく子 みきお みきえ
山 椒 あひる せつ子 せつ子